

『終戦満州を偲んだ旅行』

アメリカ在住の『満州 奇跡の脱出』の著者ポール・邦昭・マルヤマさんが昨年11月に来日。ご家族と訪れた思い出の地や、著作ドラマ化にともない行われた上海ロケでの様子など、特別な思いと共に綴られています。

終戦時、満州に取り残された日本人を救った父

私は第二次世界大戦勃発2か月前の1941年10月に、長野県出身の父丸山邦雄とアメリカ・シアトル生まれの母メアリー・万里子の三男として、東京の杉並区で生まれましました。母がアメリカ国籍であるため、私たち兄弟は全員、アメリカ国籍の日系三世として育ちました。父は明治大学卒業後、1930年に渡米。ワシントン州のピュージェット・サウンド大学に留学していた時に母と出会い、その後、父がコロンビア大学に移り二人は結婚しました。父は同大学で修士号を取得してから、ロサンゼルスで生まれた長男ロバートと母を連れ日本に帰国しました。

父は日本で大学教師になることを夢みてアメリカに留学したのですが、当時の帝国軍に抑圧されていた日本には言論の自由が全く無く、教壇に立つことを断念。学生時代の先輩の誘いで、満州・鞍山の昭和製鋼所に勤めることになり、母と四人



ポールさん(左)と弟のザビエルさん。佐世保市浦頭の埠頭にある『引揚第一歩の地』と刻まれた石碑にて。

高司令官マッカーサー元帥に満州の現状を説明し、邦人の引き揚げを陳情しました。その結果、1946年4月末から、南満州最果ての口島からの邦人引揚げが開始されたのです。

その三人のリーダーである父邦雄と、新甫八朗並びに武蔵正道は、引き揚げが開始されてからも連合国軍や日本政府に最後の引揚げ者が日本に帰国するまで圧力をかけ続けました。

拙著『満州 奇跡の脱出』は以上の経過を世界に知らせる事を目的として書きあげたもので、『Escape from Manchuria』と題し、まず英語で出版されました。

息子とともに、鞍山で暮らし始めました。戦争中の鞍山は比較的穏やかで、頻りに空襲を受ける日本よりも、安全で楽しい毎日をご過ごすことができました。

しかし、日本が降参する一週間前にソ連が日本に宣戦布告し、8月9日未明、東京の杉並区で生まれまして、父邦雄と母メアリー・万里子の三男として、東京の杉並区で生まれまして、母がアメリカ国籍であるため、私たち兄弟は全員、アメリカ国籍の日系三世として育ちました。父は明治大学卒業後、1930年に渡米。ワシントン州のピュージェット・サウンド大学に留学していた時に母と出会い、その後、父がコロンビア大学に移り二人は結婚しました。父は同大学で修士号を取得してから、ロサンゼルスで生まれた長男ロバートと母を連れ日本に帰国しました。

身的安全を求め満州を彷徨う日本人たちは、ソ連兵や現地人による虐殺、強姦の場に直面し、持参していた青酸カリを飲んだり、集団自決を実行したり、自分の子どもを中国人に預ける(後の残留孤児)など、今日もなお解決していない悲惨な事態が続出しました。

満州におけるそのような状況の中、全く無名の三人の日本人が立ち上がり、日本へと脱出。当時、日本国を占領していた連合国軍最

ました。上海ロケで驚いたのは、街並みが1946年当時の風景に改装されていたことです。

ソ連兵の戦車やトラックが走行したり、沢山の子どもたちを含めた日本人引揚げ者が必死に逃げ回ったり、ソ連兵が機関銃を携えて闊歩したり、「麻袋部隊(逃避行中、衣服も含め全てを奪われトウモロコシなどを入れる麻袋を着物に使った日本人女性たち)」などの場面を見て、これだけ大勢の方が自分の書いた作品を尊重し、一生懸命頑張らされているのだと思ひ、涙が止まりませんでした。

そして、亡くなった父と母がこの風景をどのように天国で眺めているだろうかと想像しました。自分が9年ほど前に本書を書く決心をした時を振り返り、「丸山、新甫、武蔵三者の偉業を必ず世界に知らせる」と心の中で約束したことを思い出し、やっとその約束を果たせる時期が来たのかなと、嬉しさで再び目から熱いものが溢れ出しました。

偶然、旅行の数カ月前にNHKから本書ドラマ化の提案を頂き、その撮影が日本と上海で行われるので、是非寄ってみたいかとの誘いがありました。日本旅行の直前、ロケ地が日本から上海に移ったので、皆と日本で合流する前に、私と家内のラリーは10月末に上海に寄り、撮影風景を見学させて頂きました。

敗戦の日をもって「満州」と名乗る国は消えてしまったことから、ドラマの題は『どこにもない国』となり



ポールさん一行と満蒙開拓平和記念館副館長・寺沢秀文さん(左)

NHK 特集ドラマ 『どこにもない国』

【出演】 内野聖陽、木村佳乃、原田泰造、蓮佛美沙子、満島真之介、片岡鶴太郎、萩原健一 ほか

【放送予定】
前編：2018年3月24日(土) 総合 夜9時
後編：2018年3月31日(土) 総合 夜9時

満州 奇跡の脱出
170万同胞を救出すべく立ち上がった3人の男たち
P・マルヤマ 著
高作 自子 訳
2,300円(税別)

と喜んで飛びつきました。母は静かに涙を流しながらその風景を見つめていました。その埠頭には現在石碑があり、「引揚第一歩の地」と刻まれています。

弟のザビエルと長い間その石碑を見つめ、70年前の再会を想像しました。その時の母に対する父の言葉は、「長い間、苦しい生活に耐えてよくぞ子ども達を守り抜いてくれた。本当に苦労だった。心から礼を言うよ」でした。母は涙をこぼしながら、父と手を握り合い、互いの目を見つめ合っていて、母が数年前後に話してくれたことを今でも覚えています。

その後、佐世保の浦頭引揚記念資料館を見物し、我々が全身にDDTを噴霧された所などを見、最後に今もあまり変わっていない、当時、始発駅として東京行きの汽車が出ていた南風崎(はえのさき)駅を歩き、父邦雄と母メアリー・万里子の苦勞と勇氣に心から感謝しました。

我々丸山兄弟には次の様な言葉があります。
「父は百七十万の日本人の命を救うのに努力し、母は我々子どもたち四人の命を救ってくれた」
この旅行で両親の偉大さを再度実感した次第です。(ポール・邦昭・マルヤマ)